

青少年地域活動ふるさとを見なおそう 第2集『長門昔ばなし』より

きかず
じん
不聞どころく神

なかせんどう ながくぼじゆく
中山道の長久保宿の人たちは、いろいろな願いごとを町はずれの道祖神様どうそじんさまにお願いする習わしがあつて、
「どころくじん様」と呼んでいました。

「どころくじん様」まものは魔者や疫病が町にはいりこまないように、町の入口でおさえこんでしまつたり、追いつてくれるし、旅人の道案内もしてくれるので、幸福の神様だと信じていました。

ですから、お祭りがある二月にはいると、家々ではお祭りに使う藁馬わらうまを作つたり、お萩餅はぎもちを搗くために餅米も用意しました。

山国の二月は、とても厳しい寒いときですが、農閑期のうかんきなので、今日も数人の人達が寄り集まつて、いろりを囲み、よもやま話にふけていました。

「今年は、おらいちの娘も、いい縁談があるかも知れやせんぞ……。」「そうだない。今年は、朝早かつたない。お詣りにいったじゅうじゃあ一番早かつつら……。」人々の会話には、ほのぼのとした暖かさが感じられます。

道祖神のお祭りは二月八日で、その日は朝早く起きてお萩餅を作り、道祖神様にお詣りし、道祖神様の顔にお餅のあんこを塗ると良縁が得られるという風習がありました。

「ところでさあ、おらあ困っているだわい、孫の耳がふさがっちゃって聞けねだわい、どうすりゃあいいいずらない。」と一人のおじいさんがなやみごと打ちあげました。三、四人集まると楽しい話に続いてなやみごとでもあります。

「どうだい、どうろくじん様にたのんでみたら……。」仲間の一人がこんなことをいいだすと、い合わせた人々は「それがいいぞい、そうしてみなんし……。」とみんな賛成しました。

おじいさんは、ものは試しだと思い、町から一・五キロメートルも離れている道祖神様に、「どうか孫の耳を治してください。」と、雪の降る日も、つめたい風の吹く日も欠かさずにお詣りを続けました。

一か月が過ぎ、二か月が過ぎても、おじいさんの道祖神詣りは続けられ、延百日になろうとしたある日のことです。今日も朝早く起きて、お天気が良い日でしたから孫の手を引きいつものようにお詣りをすませて家に帰ろうとしました。

その日はよいお天気だったのに、南の空がにわかにくもりピカピカとすると、するどいせん光と「ゴロゴロゴロ」と耳をつんざくようなものすごい雷の音がなり響きました。あまりの恐ろしさにおじいさんも孫もその場に倒れ込んでしまいました。

それからどのくらいたったことでしょうか・・・夕立がやんでさわやかな初夏の涼風が倒れているおじいさんの顔にあたり、ようやく正気にもどり、うつろなまなこで起きあがると、がけの下を流れている依田川には七色の虹の橋がかかっています。

おじいさんははっとして、そばに倒れている孫をだき起こすと孫もようやく気がつき「でっけい雷の音おっかねえ。」といっておじいさんのひざにすがりつきました。

おじいさんは、とびあがって喜びました。今まで聞こえなかった孫の耳が聞こえるようになったのです。うれしくてうれしくてたまりません。何とかお礼をしたい。でもうちは貧しくてお金がない。いろいろ考えたすえ、家で一番だいにしていた家宝のお椀をお礼にさしあげることになりました。

おじいさんは、家の宝にしていたお椀が、人の耳のように思えてなりませんでした。耳の穴がつまって聞こえなかったと思っていましたから聞こえるようになったのは、もとのように耳に穴が開いたのだと信じ、お椀の底に穴をあけ、ひもを通してさしあげることになりました。「どうぞくじん様。ほんとうにありがとうございます。」
といってお椀を供えて、ていねいにお礼のお詣りをしました。

これが町中の評ばんになり、隣り村の大門だいもんや、和田わだ・古町ふるまちのほうからもお詣りに来る人がふえて有名になり、耳の病気がある人にとてもごりやくがあるということで、普通の言葉とは反対の言葉で、「不聞きかずどうぞくじん」と呼ばれるようになりました。

普通の言葉と反対の言葉が使われるようになったのは戦国時代の名将武田信玄が敵をあざむくために使った言葉ですが、うそをつくために使われた言葉が、長い間にほんとうの言葉のようになってしまい、「不聞どころくじん」の、「不聞」というのもそのひとつです。